愛鷹山塊・割石沢～大岳

メンバー:三井(記録)、塚原
山行日:12 年 3 月 11 日

＊　今回の山行時に思いがけないトラブルが発生した。
　　笑い話のような出来事ではあるけれどそれで済ませては不味いと思う。状況によっては最悪の事態も招来させかねない。
　　会員諸氏にも起こりうる事、十分気をつけて頂きたい。

須津川沿いに車を走らせると自宅から僅か 30 分ほどでゲート。その手前に駐車場がある。
ゲートから暫く舗装された道路を行く。須津山荘を過ぎ、堰堤を越えると須津川を遡るルートを遡る。
沢に沿って踏み跡がついているので沢登りではない。何度か渡渉を繰り返して進んで行くと間もなく割石沢の出合い。
割石沢に入ると直に水は涸れ、顕著なルンゼとなる。ルンゼ内は数日前の雪が残っていて手袋は直ぐにびしょ濡れ状態。もともと寡雪の山で、雪で苦労するような事は余り無い山なのでオーバー手袋などの用意もしなかったが少し甘くみたか。
大きなチョックストーンの挟まった箇所には古い鉄梯子が架かっていて、残置ロープにすがって乗っ越す。
一頻り登ると稜線のコル(割石峠)。峠から僅かな登りで呼子岳の頂上に達する。無雪期ならハイカーで賑わっているが本日は人けは無く、ガスで視界もない。
少休止の後、ガスの切れ間に薄っすらと見える大岳に向う。
大岳は愛鷹山塊の主稜線から外れていて、登山口の須津山荘からのピストンが唯一のルートで、この呼子岳～大岳間は、崩壊の進んだ痩せ尾根を通過しなければならない等からガイドブックなどにもルートとして記載されていない。と、なるとそれは沢屋にはお誂えのルートとも言える訳で、僕は何度か歩いている。
ところがコルに向って下降しようとするも直ぐに急な傾斜になって落ち込んでいる。
クライムダウンするには雪の付き方も不安定で余り芳しくはない。頭の中の警告灯が点滅している。
「懸垂？」「ここで懸垂した事ってあったけ？」
しかし、懸垂するにしても持っている20mロープでは届きそうにない。
暫く下降点を変えてみたがどうも確信できる所はない。
今回は足慣らしの山行という気持ちが根底にあるせいかそれ程このルートに執着は無く、あっさり峠まで戻って往路を下降することにした。
割石峠からルンゼを下って行くが、しばらく下っていくうちどうも片方の靴に違和感がある。何気に靴をみてみるとなんと靴底がスッポリと脱落している。底が剥がれかける事はあったがスッポリ取れてしまうとは…。
幸い、シャンクと中敷はまだしっかりした状態なのでなんとか歩く事は出来る。騙しだまし下り続け、辛うじて

車にたどり着いてやれやれ、胸を撫で下ろす。

山行中の靴のトラブルというとプラブーツのトラブルはしばしば耳にする。紫外線によるプラスチックの劣化で靴が壊れるというものだ。
僕は登山靴ではないがスキー靴でこれを体験したことがある。何年使ったものだったか、そのスキー靴で滑っていたら甲の部分に亀裂が発生しそれが見る間に亀裂が広がりついにはバラバラに壊れてしまった。
もしこれが厳冬期の稜線だったら…、と思うとゾッとする出来事だった。
登山用のプラブーツが登場した時は究極の登山靴として喧伝されたものだ。靴底の張替えさえすれば恒久的に使用できる、とさえいわれた。
冬山用靴として浸透し始めたもののその後、肝心のプラスチック部が紫外線で劣化して意外に脆く壊れてしまうという事で、プラブーツの耐久性について疑問符がついて山岳誌に取り上げられたりしていろいろ議論を呼んだ。
昔の革靴は本体と靴底が丈夫な糸で縫いつけられているので長い期間、安心して使う事が出来た。しかし、今の革靴は本体と靴底を接着剤を使って一体となっているタイプのものが多い。
その靴底と本体の中間部（ミッドソール）に使われている合成ゴムなどのケミカル部分が水に濡れる事で劣化し剥離破損する、これは“加水分解”という現象で、ジョギングシューズなどにもおきるもので決して珍しい現象ではないらしい。
（修理を依頼した靴屋さんの説明です。）
帰宅後破損していないもう片方の靴はどんなだろうか、と靴底を引っ張ってみたらあっけなく半分ほど本体から剥がれてしまった。
外見的にはどうも無い様に見えていて実は破損しかかっている靴など始末が悪い。厳冬期の稜線で靴が破損したら進退窮まる事になる。
こうした状態になるのは使用年数やら使用環境、或いは保管状況でいつ、とは分からないから厄介だ。
いずれにしても山行の当日ゲタ箱から引っ張り出してそのまま履いて行く、などという事はすべきではなく、事前のチェックを十分に行って使用するようにしたいものだ。